

# 神さまからの手紙

(バックナンバー総集編 1 )



宮尾八幡宮

平成 30 年 12 月

神道には他の宗教と違い教典がありません。又他の宗教のように〇〇教では無く、神道と呼ばれます。それは何故でしょうか？一言で言えば、稲作農業から生まれた日々の教えなのです。「神道の教えは日用にあり」「人の道は神の道」見直し、聞き直し、言い直し、日々の生活の中に教えがあるのです。人に教えられそして反省し、日々が学びの道です。その教えは身近にあり、身近の出来事からそれに気づき、まなぶ心は自分にあると云っていいでしょう。神道においてやることは、自分の心を磨いて自分の心で真実をつかみとってだけです。

そして今貴方の周りに起きている現実はあるあなたの生きてきた心を映す鏡なのです。

「神さまからの手紙」これは、私が心に残った話をメモにして社頭に置いているものをバックナンバーとして纏めたものです。此の冊子から生きる力、人としての真実をつかみとって下されば幸いです。

宮司敬白

## 目 次

1. 4歳の娘
2. 手話
3. ベトナム中を涙させた少年
4. 我が心の故郷天草
5. 水泳大会
6. 無くなったナイフ
7. 手の絵
8. 母の弁当
9. 父の人参
10. 亡き妻へ
11. バスと赤ちゃん
12. 弟
13. オムライス
14. マンガール村の日の丸
15. 両陛下、オランダ訪問
16. 父ちゃんのポーが聞こえる
- 易しい神道
17. 縄跳びの紐
18. 病院の外に健康な日を三日下さい
19. ひとつもものも、自分を映す鏡
20. 神嘗祭・新嘗祭

## 1. 4歳の娘

4歳になる娘が、字を教えてほしいとやってきたので、どうせすぐ飽きるだろうと思いつつも、毎晩教えていた。

ある日、娘の通っている保育園の先生から電話があった。

「〇〇ちゃんから、神さまに手紙を届けてほしいって言われたんです」

その手紙をこっそり読んでみたら

「かみさま、いいこにするので、パパをかえしてください。おねがいします」と書いてあったそうだ。

主人は去年、交通事故で他界した。字を覚えたかったのは、神様に手紙を書く為だったんだ……電話を持ったまま、私も先生も泣いてしまった。

「もう少ししたら、パパ戻ってくるんだよ～」

最近、娘が明るい声で話す意味がこれでやっと判った。

娘にとって、心と写真にしか残っていない主人を思って涙が止まらない。

(若いお母さんの手記より)



(平成 25 年 3 月版) No.1

## 2. 手話

俺には母親がいない。俺を生んですぐ事故で亡くなった。生まれたときから耳が聞こえない俺は物心ついた時にはすでに簡単な手話を使っていた。耳が聞こえない事でずいぶん苦労をした。普通の学校には行けず、障害者用の学校で学童期をすごしたわけだが、片親だったこともあってか、近所の子供に馬鹿にされた。耳が聞こえないから何を言われたか判らないが、あの見下ろすような馬鹿にした顔は今も忘れられない。その時は、自分がなぜこんな目にあうのか判らなかつた。

やがて障害者であるということがその理由だとわかると俺は塞ぎこみ思春期の多くを家で中で過ごした。自分に何の非も無く、不幸な目にあうのが悔しくて仕方なかつた。だから俺は父親を憎んだ。そして死んだ母親すら憎んだ。なぜこんな体に生んだのか、なぜ普通の人生を俺にくれなかつたのか。手話では到底表現できない想いを暴力に変えて叫んだ。ときおり爆発する俺に父は抵抗せず、ただただ、涙を流し「すまない」と手話で言い続けた。

そんな中での唯一の理解者が俺の主治医だった。俺が生まれた後、耳が聞こえないと判った時から、ずっと診てくれた先生だ。俺にとってはもう一人の親だった。いつも悩みの相談にのってくれた。俺が父を傷つけてしまった時も、優しい目で何も言わず聞いてくれた。咎める事も、慰める事もせず聞いてくれる先生が大好きだった。そんなある日、どうしようもなく傷つくことがあって、泣いても泣き切れない、悔しくてどうしようもない出来事があった。俺は先生のところにいった愚痴をいいそして最後

「死にたい！！」

と手話で表した時だと思う。先生は急に怒り出し俺の頬を思いきり殴った。俺はビックリしたが、先生の顔を見てさらに驚いた。先生の目に涙が溢れていた。そして俺を殴った震える手で静かに話し始めた。

ある日、おれの父が赤ん坊を抱いて先生の所にやってきたこと。検査結果は最悪で、俺の耳が一生聞えないだろうと父に伝えたこと。俺の父はすごい剣幕でどうにかならないかと詰め寄ってきたこと。そして次の言葉は俺に衝撃を与えた。

「君は不思議に思わなかったかい。君が物心ついた時には、もう手話を使えていたことを」たしかにそうだった。俺は特別に手話を習った覚えは無い。じゃなぜ……「君のお父さんは僕にこういったんだ」

「声と同じように僕が手話を使えばこの子は普通の生活を送れますか」

「小さい頃からの聴覚障害は知能発達の障害になりうる、だが声と同じように手話が使えれば、もしかしたら……普通の生活が」

「しかしそれは決して簡単な事じゃない」「その為には親が今から手話が普通に使えるようにならなきゃならない」「健常者が普通の会話並みに手話がつかえるには数年はかかる」

「全てを投げ捨てて手話の勉強に専念したとしても、並の努力では無理だ」

不可能に近い。僕がそう伝えた。

「その無謀な挑戦の結果は君が一番良く知っているはずだ」「君のお父さんはその不可能なことに、君のために仕事をなげうって挑戦したんだよ」

「君のお父さんはね、何よりも君の幸せを願っているんだよ」「だから死にたいなんて、言っちゃ駄目だ」

聞きながら涙が止まらなかった。父さんはその時、していた仕事をなげ捨てて。俺の為に手話を勉強したのだ。並大抵の努力ではなかったはずだ。俺はそんな事も知らずに、たいした収入もない父を馬鹿にしたこともある。俺が間違っていた。父さんは誰よりも俺の苦しみを知っていた。そして誰よりも俺の幸せを願っていた。涙で濡れる頬をぬぐうこともせず俺は泣き続けた。そして父さんに暴力を振るった自分を憎んだ。なんて馬鹿なことをしたのだろう。あの人は俺の親なのだ。耳が聞こえないことに負けたくない。父さんが負けなかったように。俺も負けなくて幸せになろう。そう心に決めた。そして心を入れ替えた。

そして努力の結果、今俺は手話を教える仕事をしている。そして春には結婚も決まった。俺の障害を理解してくれた上で、愛してくれる最高の人だ。父さんに紹介すると、母さんに報告しなきゃなどと言って父さんは笑った。でも遺影に向かい、線香をあげる父さんの肩は震えていた。そして遺影を見たまま話し始めた。俺の障害は先天的なものではなく、事故によるものだったらしい。俺を連れてあるいていた両親に居眠りの車が突っ込んだそうだ。運よく父さんは軽症だったが、母さんと俺はひどい状態だった。俺は一命を取り留めたが母さんは帰らぬ人となった。母さんは死ぬ間際、父さんに一言。

「私の分までこの子を幸せにしてあげてね」

父さんはうなずいて約束した。でもしばらくして俺に異常が見つかった。

「あせったよ、お前は普通の人生を歩めないんじゃないかって。約束守れないんじゃないかってなあ〜」「でもこれでようやく。約束……果たせたかなあ……母さん」

最後は手話でなく、上を向きながら呟く様に語っていた。聞こえなかったけど何て言っているか伝わってきた。俺は泣きながら、父さんに向かって手話でなく、声で言った。

「ありがとう、父さん」



でも俺は耳が聞こえないからちゃんと言えたかわからない。  
(ある青年の手記より)

(平成 25 年 4 月 15 日版) No.2

### 3. 東日本大震災 (ベトナム中を涙させた少年)

震災直後、福島県に派遣された一人の警察官がいた。彼は在日ベトナム人の両親を持ち日本で生まれ、人の為に働きたいと日本国籍を取得、警察官になった。その彼が派遣された場所は、福島第一原発から 25km 離れた被災地。震災と原発事故の最も過酷な状況の中で治安維持のための派遣だった。被害者と向き合った初日こそ涙を流したものの、余りにも酷い (ひどい) 惨状に泣く事さえも忘れ、ただ呆然と仕事をこなす毎日となった。

忘れもしない 3 月 16 日の夜。被災者に食料を配る手伝いのために向った学校で、彼は 9 歳の男の子に出会った。

寒い夜だった。なのに男の子は短パンに T シャツ姿のまま食料分配の列の一番最後に並んでいた。気になって彼は話しかけた。それは長い列の一番最後にいた少年に夕食が渡るか心配になったからだ。

少年はその警察官にポツリポツリ話しを始めた。少年は体育の時間に地震と津波にあう。近くで仕事をしていた父が駆けつけようとしてくれた。しかし少年の口から想像を絶する悲しい出来事が語られた。それは父が車ごと津波にのまれるのを学校の窓からその眼で見たのだった。「海岸に近い自宅にいた母や妹も助かっていると思う」と話したのだ。家族の話をする少年は、不安を振り払うかのように顔を振り、にじむ涙を拭 (ぬぐ) いながら声を震わせた。悔しさと心細さと寒さで……………



彼は自分の着ていた警察コートを脱いで少年の体にそっと掛けた。そして持ってきていた食料パックを男の子に手渡した。遠慮なく食べてくれるであろうと思っていたその彼が眼にしたものは、受け取った食料パックを配給用の箱に置きに言った少年の姿だった。

啞然とした彼の眼差し (まなざし) を見つめ返して少年はこう言った「ほかの多くの人が僕よりもっとおなかですいているだろうから……………」

警察官の彼は少年から顔をそらした。忘れかけていた熱いものがふと湧き上がってきたからだ。少年に涙を見られないように。

それにしても、この 9 歳の男の子、しかも両親が行方不明で心配だろう一人の少年が困難に耐え、他人のために思いやれる心をどこに内在しているのか。彼は感動した。

自分の胸の中に仕舞っておくにはあまりにももったいない話だった。いや、誰かと感動を分かち合いたかった。彼はベトナムの友人にこの体験を打ち明けた。ベトナムの友人も感動して祖国の新聞記者に伝えた。その結果、新聞記者は記事を載せて、次のように少年と日本を賞賛した。「彼がベトナムの友人に伝えた日本人の人情と強固な意志を象徴する小さな男の子の話に、我々ベトナム人は涙を流さずにはいられなかった」と……………

「わが国にはこんな子がいるだろうか」この記事が大変な反響をよび、国民一人ひとりが決して裕福とはいえないベトナム国民から義捐金が殺到した。

そして我々も、悲劇と苦難のもとでも失われない、けなげな日本の美質と負けない力を

一少年の小さな行為から教えられた。本当に有難う。

(JICAのHPより)

(平成25年 7月 1日版) No.3

#### 4. 我が心の故郷 天草

私が少年時代、天草の島はどこも貧しかった。私の家は、五反百姓の零細農家のうえに、子沢山。姉や兄は中学卒業と同時に働きに島から出て行った。全て口減らしの為だ、私は姉や兄が小さな連絡船で港から出て行くたびに、突堤の先端の赤い灯台の下で、いつまでも姉や兄に手を振り立ち続けた母の姿を、今でもはっきりと思い出すことができる。海の上に約二百メートルに延びた防波突堤と、その先端にある赤い灯台の物寂しさは、八月十五日の夜、その灯台の沖に浮かぶ幾重にも重なる精霊船の灯りと共に、私の心の中にある忘れることの出来ない故郷の風景である。

さて中学一年生に入学した年の春の遠足は、私にとって、一生忘れることのできない遠足となった。遠足の楽しみは何と言っても弁当であり、私の家でも、遠足の時だけは母がいつも、米飯の大きなにぎりめしに、卵焼きを添えてくれるのであった。待ちに待った遠足の朝、母が悲しそうな顔をして私に弁当を渡す。弁当の中身はサツマイモだと告げられた。蚊の鳴くほどのかすかな声で「かんべんして」といったようだ。母は目に涙を浮かべその手はブルブルとふるえていた。私は思わず母の手をおもいっきり振り払い、私は土間を飛び出し、振り返ってみた。母は土間に泣き伏していたのである。

さて、遠足の弁当の時間、私は天神山の山頂の藪の中にいた。みんなの前でザツマイモの弁当を開く勇気がない。クラスみんなが私をさがしている。

「忠夫くーん、一緒に弁当食べよう！」

その声を遠くに聞き、私は一人ひそかに藪にひそんでいた。しかし、空腹には勝てず私は泣きながら母の作ってくれた弁当を開いた。涙がサツマイモに落ちなんとも情けなかった。家に帰ってからも私は母をののしり責めた。母がどれほどつらい思いをしているかなど、中学一年生の私には理解できなかったのだ。

中学三年生になり、担任の先生の勧めもあり、私は島の高校ではなく、熊本市内の有名 K 高校を旨ざしていた。そのため必死になって勉強もしてきた。

そんな十二月のある夜、父と母は私を囲炉裏端に坐らせ

「忠夫や、熊本の高校はあきらめてくれ」「父ちゃん  
は、おまえを熊本に下宿させるお金がない。島の高校ならなんとかなる。島の高校で、がまんしてくれ」

と私に頼みこんできたのである。私は、夢を打ちひしがれ、泣きながら父の甲斐性の無さを、大声で罵(ののし)った。日頃、厳しい父も、その時は無言で何かをかみしめているようであった。母は、何かを頼むような目で私をじっと見つめ、その目には涙が光っていた。しかし、私は、消えかけた囲炉裏の火を見つめながら、父母を罵(ののし)り続けたのであった。

それ以来、私は家族の誰とも口をきかなくなった。あんなに熱を入れていた勉強もほっ



ぼりだした。重苦しい毎日が続いた。そして年が明けて元旦となった。島を離れ、社会人として働いている姉と兄が帰省してきた。

元旦、近くの氏神様への初詣には家族全員で参拝するのが我が家の長い慣わしであった。私はそれにも参加しなかった。元旦の朝から布団をかぶってフテ寝である。ふと目をさますと、枕元に十枚たらずの年賀状が置いてあった。私は、それとなく年賀状をめくって見た。親しい友人からのもので、「今年も宜しく」とありふれたものであったが、そして最後の年賀状をめくって、私はドキリとした。その年賀状は、カタカナ交じりの、鉛筆書きで、ところどころ鉛筆をなめた後があり、差出人は書いてなかったが母からのものであることは直ぐにわかった。ハガキにはこう書いてあったのである。

「おまえに"明けましておめでとう"というのは母さんはつらい。でも母さんは、おまえが元旦の朝、家族の前で笑いながら"おめでとう"と喋っている夢を何度もみたよ。おまえがまだ小さい頃、おまえが泣き出すと、母さんは子守唄を歌ってやったもんだ、その子守唄を聞くと、おまえはスヤスヤと眠ったもんだ。しかし、高校を控え立派になったお前に、貧乏な母さんは歌ってやれる子守唄がない。どうしたらいいのかわからない。貧乏な母さんを許しておくれ…」

年賀状を読み終えた十四歳の私は、布団の中で声を殺して泣いた。中学三年生の反抗期の私に向けて母が歌ってくれた"心の子守唄"“だったのである。なんと私はわがままだったのか、兄も姉も高校には行っていない。いけるだけでも幸せなのに何を反抗していたのか。

「すまなかった」「本当にすまなかった」

このとき、はじめて私は親の気持ちが変わった。私は、とび起きて布団をキチンとたたんだ。申しわけないという気持ちでいっぱいになった。

この母の子守歌のおかげで、私は立ち直り地元の高校に進学し、その後、一生懸命勉強したかいもあって大学に進学することもできた。

父は、私の大学入学の時、大切に残してあった、山の種松を売って、入学費用を作ってくれたのであった。

(荒木忠夫 「我が心の故郷 天草」NHK 全国作文コンクールより)

(平成 25 年 9 月 10 日版) No.4

## 5. 水泳大会

ある高校で夏休みに水泳大会が開かれた。種目にクラス対抗リレーがあり、各クラスから選ばれた代表が出場した。

その中に小児マヒで足が不自由な A 子さんの姿があった。からかい半分で選ばれたのである。だが、A 子さんはクラス代表の役を降りず、水泳大会に出場し、懸命に自分のコースを泳いだ。その泳ぎ方がぎこちないと、プールサイドの生徒たちは笑い、野次った。

その時、背広姿のままプールに飛び込んだ人がいた。校長先生である。

校長先生は懸命に泳ぐ A 子さんのそばで、「頑張れ」、「頑張れ」と声援を送り自らも背広姿のまま一緒に泳いだ。その姿にいつしか、生徒たちも肅然(しゆくぜん)となった。

(東井義雄先生の話より)



## 6. 無くなったナイフ

昭和 19 年 5 月 12 日、ニューギニアのポーランジャの空中戦で戦死した生徒がおりました。弱冠 19 歳。この生徒は、お兄さんがすばらしく頭がよく、いつも家で比較されて、偏愛の中で冷たく育てておりました。学用品を買うのにも「馬鹿タレ、勉強もできんものが、何で金が必要か」と叱られるのです。

それが恐くて、ある日彼は友人の切り出しナイフを盗んでしまいました。教室で「今朝買って来た切り出しナイフがなくなった」というある生徒の訴えを聞いてヒヤッとしました。

「あの子ではなかろうか」と暗然といたしました。

生徒を外に出して調べてみると、案の定、鞆の外側は削って墨を塗って使古した様になっているけれど、抜けば新品の切り出しナイフが彼の机の中にありました。私は、すぐその足で自転車を飛ばして金物屋に行き、それと同じ物を失くした生徒の机の奥に入れておきました。

やがて、教室にはいつてきた生徒に

「君はあわて者だから 『なくなった』 なんかいすが、よく調べてみるんだね」

というと、机の奥から私が買って来て、しのばせて置いた切り出しナイフを探し出して

「先生、ありました、ありました！」 と喜びました。

そのとき、教室の一隅から、うるんだ眼で私を見ていたのが、昭和 19 年 5 月 12 日、空中戦で亡くなったその生徒でした。彼は、死の前日、手紙を書いて私に送ってくれました。

「明日は、ポーランジャの空で僕は見事に戦死できると思います。その前にたった一言、先生にお礼を申し上げたい。友達のナイフを盗んだ時、先生はなにも言わないで僕を許してくださいました。死の寸前になってそのことを思い出し 『先生ありがとうございました』 とお礼を申し上げます。どうぞ先生、お元気で、僕のような子どもをよろしく願います」というのが絶筆でした。

(徳永康起先生の話より)

(平成 25 年 11 月 23 日版) No.6



## 7. 手の絵

ある感謝祭の日に新聞を読んでいると、一つの記事が目についた。それは、ある小学校の先生のこんな話だった。その先生は自分のクラスの一年生たちに、感謝祭にちなんで自分たちが何か感謝しているものを絵に描くように言った。

しかし正直なところ、この学校に通う子どもたちの家庭は貧しく、感謝するものが何もないかもしれないと思った。ほとんどの子どもたちが、肥った七面鳥か、テーブルに山と盛り上がった感謝祭のごちそうを想像して描いていた。子どもたちなりの夢だったのである。

さて、書き終えた絵を、黑板にはってみんなで感想を述べ合った。そんな中、ダグラス君が描いた絵は、先生を始めみんなを驚かせた。それは、子どもっぽい単純な線を使った「手」の絵だった。一体誰の「手」なんだろう？ クラス全員がこの謎めいた抽象画にすっかり心を奪われた。やがて、一人の子どもがこう言った。



「きっと神さまの手だよ。食べ物をその手いっぱいを持ってきてくれるんだ」

「ちがうよ。きっとお百姓さんの手だよ。だって七面鳥を育ててるのはお百姓さんだもの」

と別の子が言った。生徒たちは思い思いに想像をめぐらしていたが、やがて静かに自習を始めた。先生はダグラス君のそばに歩み寄ると腰をかがめ、こっそり話しかけた。

「ダグラス君、あれは誰の手だったの？」

「それは、それはね 先生の手だよ」と、ダグラス君の消え入りそうな声が返ってきた。

そういえば、先生は休み時間になると、ひとりぼっちでいるダグラス君の小さな手をしばしば握ってあげたことを思い出した。特別扱いしたつもりはないが、その手は彼をととても幸せな気持ちにさせたのだろう。

私は、感謝祭とは与えられたものや好意に対して感謝する日だとばかり思っていた。しかし、この記事のおかげで、感謝祭のもうひとつの意味がわかった。どんなささやかなことでも、人に何かをしてあげるチャンスを与えられたことに対して感謝する日でもあったのだ。

(心のチキンスープより ダイヤモンド社)

(平成 26 年 2 月 15 日版) No.7

## 8. 母の弁当

私の母は昔から体が弱くてそれが理由からか知らないが、母の作る弁当はお世辞にも華やかとは言えないほど質素で見栄えの悪いものだった。

友達に見られるのが恥ずかしくて、毎日食堂へ行き、弁当はゴミ箱へ捨てていた。ある朝母が嬉しそうに

「今日は〇〇の大好きな海老入れといたよ」と私に言ってきた。私は生返事でそのまま学校へ行き、こっそり中身を確認した。すると確かに海老が入っていたが殻剥きもメチャクチャだし彩りも悪いし、とても食欲を感じなかった。

家に帰ると母は私に

「今日の弁当美味しかった？」としつこく尋ねてきた。私はその時イライラしていたし、いつもの母の弁当に対する鬱憤も溜まっていたので

「うるさいな！あんな汚い弁当捨てたよ！もう作らなくていいから」

と、ついきつく言ったしまった。母は悲しそうに

「気付かなくてごめんね……」

と言いそれから弁当を作らなくなった。それから半年後、母は亡くなった。私の知らない病気だった。母の遺品を整理していたら、日記が出てきた。中を見ると弁当の事が書いてあった。

「手の震えが止まらず、上手く卵焼が出来ない」と、

後悔で涙が出て止まらない。なぜ叶わない手で一生懸命作った弁当の母の気持ちが判らなかつたのか…………。

(出典不明、市井からの話)



(平成 26 年 5 月 1 日版) No.8

## 9. 父の人参

俺の母親は、俺が2歳の時に癌で死んだそうだ。まだ物心つく前のことだから、当時はあまり寂しいなんていう感情もあまりわかかなかった。この手の話でよくあるような、「母親がいない事を理由にいじめられる」なんて事も全然なくて、良い友達に恵まれて、それなりに充実した少年時代だったと思う。

こんな風に片親なのに人並み以上に楽しく毎日を送っていたのは、やはり他ならぬ父の頑張りがあったからだとも思う。あれは俺が小学校に入学してすぐにあった、父母同伴の遠足から帰ってきたときのこと。父は仕事で忙しいことがわかっていたので、一緒に来られないことを憎んだりはしなかった。一人お弁当を食べる俺を、友達のY君とそのお母さんが一緒に食べようって誘ってくれて、寂しくもなかった。でもなんとなく、Y君のお弁当に入っていた星形の人参がなぜだかとっても羨ましくなって、その日仕事から帰ったばかりの父に

「僕のお弁当の人参も星の形がいい」ってお願いしたんだ。

当時の俺はガキなりに母親がいないという家庭環境に気を使ったりして、「何でうちにはお母さんがいないの」なんてことも父には一度だって聞いたことがなかった。星の形の人参だって、ただ単純にかっこいいからって、羨ましかっただけだったんだ。でも父にはそれが、母親がいない俺が一生懸命文句を言っているみたいに見えて、とても悲しかったらしい。突然俺を抱いて「ごめんな、ごめんな」って言ってわんわん泣いたんだ。いつも厳しくって、何かいたずらをしようものなら遠慮なくゲンコツを落としてきた父の泣き顔を見たのはそれがはじめて。同時に何で親父が泣いてるかわかっちゃって、俺も悲しくなって台所で男二人抱き合ってわんわん泣いたっけ。それからというもの、俺の弁当に入ってるにんじんは、ずっと星の形をした。



高校になってもそれは続いて、いい加減恥ずかしくなってきた

「もういいよ」なんて俺が言っても、

「お前だってそれを見るたび恥ずかしい過去を思い出せるだろ」って冗談めかして笑ってた。

そんな父も、今年結婚をした。相手は俺が羨ましくなるくらい気立てのいい女性だ。結婚式のスピーチの時、俺が「星の形の人参」の話をしたとき、親父は人前だったのに、またわんわん泣いた。でもそんな親父よりも、再婚相手の女の人のほうがもらい泣きしてもっとわんわん泣いてたっけ。

良い相手を見つけられて、ほんとうに良かったね。

心からおめでとう。そしてありがとう、お父さん。

(出典不明、市井からの話)

(平成26年9月1日版) No.9

## 10. 亡き妻へ

51. 60753, -2. 386546

一見、何の意味も感じられない無機質な数字が並ぶ・・・しかし、この数字には心を震わせるある真実が隠されているのです。

今から 50 年前、イギリス人のウィンストン・ハウズさんは最愛の妻 ジャネットさんと幸せな家庭を築いていました。無口で真面目な夫。妻はそんな夫をいつも明るく支えていました。ところが、結婚 33 年目のある日。そのかけがえのない幸せは奪われました。妻が突然、亡くなったのです。一人ぼっちの家に、もう妻はいません。途方もない寂しさ。「生きていてもしょうがない」夫はそう思いつめました。自分は妻に感謝の思いを伝えられなかった・・・

妻を本当に幸せにしてやれなかった・・・そんな後悔だけがおしよせます。

「今からでは遅いだろうか。天国の妻に愛を伝えることはできないだろうか」。

ある日、ウィンストンさんは自分が持つ土地に向かいました。そして、その土地に檜の木を一本一本、自分の手で植えていきました。

51. 60753, -2. 386546

実はこの数字は緯度と経度を表しています。パソコンを開き、グーグルアースにこの数字を正確に打ち込んでみてください。そこには、ウィンストンさんが天国の妻に贈った究極の愛の形が現れます。

(英国で話題になった話より)

平成 27 年 1 月 1 日版 No.10

## 11. バスと赤ちゃん

東京にいた頃の思い出です。12 月も半ば過ぎたころの話です。私は体調を壊し、週二回、中野坂上の病院に通院していました。その日は今にも雪が降り出しそうな空で、とても寒い日でした。昼近くになって、病院の診察を終えバス停からいつものようにバスに乗りました。既にバスは座席はなく、私は前方の乗降口の反対側に立っていました。社内は暖房が効いていて、外の寒さを忘れるほどでした。まもなくバスは東京医科大学前に着き、そこでは多分病院からの帰りでしょう、どっと多くの人乗り、あっという間に満員になってしまいました。乗客の熱気と暖房とで先ほどの心地よさは一度になくなってしまいました。

バスが静かに走り出したとき、後方から赤ちゃんの火のついたような泣き声が聞こえました。私には見えませんが、ギュウギュウ詰めのバスと人の熱気と暖房とで、小さな赤ちゃんにとっては苦しく泣く以外方法がなかったのだと思えました。泣き叫ぶ赤ちゃんを乗せて、バスは新宿に向い走っていました。バス停に止まる度、乗客が増えるにつれ熱気がこもり、益々、赤ちゃんは大きな声で泣くのです。

「私はうるさいな、どんなお母さんだ！」

他の乗客もそんな気持ちだったと思います。バスが次のバス停に着いた時、何人かが降り始めました。最後の人が降りる時、後方から、

「待ってください 降ります」と、

若い女の人の声が聞こえました。その人は立っている乗客の間をかきわけるように前の方に進んできます。その時、私は子どもの泣き声がだんだん近づいて来ること

で、泣いた赤ちゃんを抱いているお母さんだな、とわかりました。そのお母さんはベビーカーを引きずり、赤ちゃんを小脇に抱え、乗客をかき分けやっとの思いで運転手さんの横まで行き、お金を払おうとしますと運転手さんは

「お客さんどこまで行くの？」



と聞いています。その女性は小さな声で

「新宿駅まで行きたいのですが、子どもが泣くので、皆さんに迷惑かけますからここで降ります」

と答えました。すると運転手さんは

「ここから新宿駅まで歩いて行くのは大変ですよ、しかも赤ちゃんを連れてこの寒い中。赤ちゃんが風邪引きますよ。目的地まで乗って行ってください」

と、その女性に話しました。

そして急にマイクのスイッチを入れたかと思うと

「皆さん！この若いお母さんは新宿まで行かれるようですが赤ちゃんが泣いて、皆さんにご迷惑がかかるので、ここで降りるといっています。子どもは小さい時は泣きます。赤ちゃんは泣くのが仕事です。どうぞ皆さん、少しの間、赤ちゃんの鳴き声は耳障りでしょうが、赤ちゃんとお母さんを一緒に乗せて行って下さい」

と、言いました。私はどうしていいかわからず、多分皆もそうだったと思います。ほんの数秒かが過ぎた時、

一人のお客さんが拍手をしました。するとその拍手につられてバスの乗客全員の拍手が返事となったのです。

近くに座っていた青年が、

「気が付きませんでした、どうぞお座り下さい」っと、席を譲りました。その若いお母さんは何度も何度も頭を下げて

「ありがとうございます。ありがとうございます。すみません」

お母さんの眼に涙が浮かび、頬を伝ってバスの床に落ちたのです。今でもこの光景を思い出すと、目頭が熱くなり、ジーンとききます。私のとても大切な、心にしみる思い出です。

(出典不明、市井から青年の手記)

(平成 27 年 2 月 1 日版) No.11

## 12. 弟

ある家庭に脳に障害のある男の子が生まれた。そして数年後、次男が誕生。小さい頃、弟の「兄ちゃんはおバカじゃないか！」と言うのを聞いて、母はお兄ちゃんに何を言うのよ。

「お母ちゃんはね、お兄ちゃんもあんたも、どっちも大好き。あんたが、お兄ちゃんをおバかにするとね、お兄ちゃんのことを大好きなお母さんは、悲しいの」と諭し、怒ったりはせずじっと待つことにした。

兄が中学 1 年に入学したとき、同級生を招いて兄の誕生日のお祝いをした。ところが、兄は悲しいかな急に招待した同級生を殴り始めた。そのとき弟が飛び出してきて----「兄ちゃん-----、殴るんだったら僕を殴って」「僕なら痛くないから！！」それを聞いた母親は、心の中で

「ありがとう。」と。



その弟が小学 1 年に入学したとき、隣の席は手に障害のある子だった。体育の授業は、体操服に着替えねばならないので、当然その隣の子は、着替えに手間取って遅れてきた。しかし、2 回目からは時間通りに来たので先生は不思議に思い、体育の授業のある日、そっと教室をのぞいてみた。するとあの弟が一生懸命になって、着替えを手伝っているのを見た。先生は、この事をみんなに話そうと思ったが、せっかく弟が自主的にやっている事なので黙っていた。

さて七夕の前日授業参観があった。先生が児童の書いた短冊の願い事を読んだ。子供らしい

「おもちゃが欲しい」などの願いの中に-- 「神さま---どうか、〇〇君の腕を早く直して下さい---

と、書いてあるのを見つけた。そうあの弟が書いたもの。先生は、たまらなくなつて授業参観の父兄皆の前で、この弟の着替えの事を話し出した。自分の子が手に障害があるので、皆に迷惑をかけているのではないかと教室の隅で小さくなって授業を見守っていた母親が、突然その弟の前にひざまずき、足元で号泣した。「〇〇ちゃん 有り難う、本当に有り難う！-----」

(涙した感動的な話集より)

平成 27 年 8 月 1 日版 No.12

### 13. オムライス

俺がまだ 10 代ころの話。当時俺の家はいわゆる片親つてやつで、すごく貧乏だった。子供 3 人養うために、母ちゃんは夜も寝ないで働いてた。それでもどん底だった・・・

俺は中学卒業してすぐ働きに出た。死ぬほど働いた。母ちゃんや弟の為に、遊んでる暇なんてなかった。1 年ぐらいつて同級生に久しぶりに会った。飯食いに行こうつて話になった。生まれて初めて、レストランに入った。ところが、メニューが理解出来なかった。しかもメニューの漢字・・・読めなかった。読めたのは、一つだけカタカナで書いてあった「オムライス」だけ。同級生は

「又焼麺とごはん」

つて注文した。無知な俺は

「じゃあ俺はオムライスとごはん」

つて店員に言った。店員、固まっていた。クスクスつて笑い声も聞こえてきた。そしたら同級生

「さっきのキャンセルね！！俺もオムライスとごはん！！」・・・

オムライスとご飯が運ばれてきた。何だ！どっちもご飯じゃないか。なんて俺はバカなんだ。店出た後、同級生が一言

「うまかったな」つて言った。「仕事がんばれよ」

つて言ってくれた。泣けてきた俺と一緒に恥をかいてくれた。そいつは今でももっとも大事な親友です。

(昭和の中頃のある青年の手記から)



平成 27 年 10 月 1 日版 No.13

### 14. マンガール村の日の丸

それは平成 5 年 (1993) 第 15 回パリ・ダカールラリーでの出来事でございます。この

大会にプライベーターとして四輪部門で参戦した日本人のチームがいました。

ワークス（メーカーのフルサポート）でなくプライベーターでありながら二人は善戦しゴールのダカール近くのモーリタニア国まで来ておりました。二人の運転する四輪駆動車はモーリタニア国の砂漠を一路南下し、マンガール村という小さな漁村近くで不運にも砂漠に突き出していた岩山に激突し大事故を起こしてしまったのでした。

二人の乗った車は大破横転。車内の二人は複雑骨折などの重傷を負い自力で外にも出られず、このまま放置されれば二人の命はありません。しかし周囲は見渡す限りの砂漠、通りがかる人影すらなく、まさに二人の日本人の命が尽きようとしていました。しかしそこに運よくラクダを連れた一人の少年が通りかかったのです。少年はその事故のあり様を目にし、村に駆け戻ると、こう叫びながら村を回ったのでした。

「お父さんの乗っている漁船と同じ国旗の付いた自動車が事故にあっているよ、早く助けてあげなくては」

それを聞いた村人は、漁に出ていたものまで呼び戻し、文字通り村人総出で救出に向かい、車から二人を救い出すと、軍の駐屯地に運びました。そこから軍のヘリで病院に搬送され一命を取り留めることが出来たのです。

しかし、いくら人命救助に理由は要らないと言え、なぜ村人は、漁に出ていたものまで呼び戻して救出に駆けつけたのでしょうか。その秘密は少年の

「お父さんの乗っている漁船と同じ国旗のついた自動車が事故にあっているよ」

にあるのです。この国旗というのは日本の日の丸だったのでした。そう、お父さんの乗っている漁船には日本の日の丸が描かれていたのです。なぜ少年のお父さんの漁船に日本の日の丸が描かれていたのか。モーリタニア国の90%は砂漠に覆われており、作物の育つのは川沿いのわずかな地域のみ。それ故マンガール村の人々は小さな手漕ぎボートで漁をし、生計を立てていたのです。それゆえ沖まで漁に出られず、漁獲高も少なく、村人の生活は常に困窮していたのです。それを知った日本は1992年からODAとして、漁船、船外機を贈っていたのです。それにより漁獲高も増え、流通の為の市場も日本のODAで整備され、村人の生活も豊かになりました。

もうお分かりでしょう。少年の父親の漁船には日本との友好の証として、両国の国旗が並べて描かれていたのです。たまたま事故現場に遭遇した少年は、日本の国旗「日の丸」を見覚えていたのです。日の丸をつけてこの国に来た人に対して恩返しをしなくてはという気持ちが村の人全員でこの救出劇となったのです。事故にあった二人のドライバーも、日本とモーリタニア国の友好の関係を知らなかったのは、命を取り留めた病院のベッドの上だったそうです。

日本から遥か遠く1万5千キロも離れた西の果てのアフリカの砂漠の国。日本人の多くが名前も知らない国の小さな村に、日の丸に並々ならぬ思い入れをもつ人々が暮らしているのです。しかし、多くの日本人はこの事を知らないでしょう。稀有な運命の巡り合わせが、日本とモーリタニアの友好を、さらに深めることになったのはいうまでもありません。

（外務省のHPより）

追記：スーパーで見かけるタコにモーリタニア産があると思います。即ち日本のODAの結果なんですね



## 15. 両陛下、オランダ訪問

平成 12 年のことです。オランダ国女王陛下から招かれて天皇皇后両陛下がオランダをご訪問されました。それはオランダと日本との交流 400 年に当たる記念すべき年なのですが、オランダは対日感情はあまり良くありません。

それは 1942 年に遡ります。日本軍はオランダの植民地であったインドネシアを進攻・占領、解放・インドネシアは独立。過酷な植民地支配を受けていたインドネシアにしてみれば、希望の光り日本ですが、オランダにしてみれば苦々しい記憶となります。又、植民地時代オランダが現地人を収容していた収容所にオランダ兵を収容したことなど、屈辱的なことを日本軍にされたという感情から、対日感情は良くありません。

そんな関係を修復するきっかけになったのが平成 12 年の天皇皇后両陛下のオランダ訪問だったのです。

その訪問で、両陛下はオランダ王宮の戦没者記念碑に献花され 1 分間の黙祷を捧げられました。その際、身じろぎひとつないその陛下のお姿は、オランダ国内に放映され、オランダのベアトリクス女王は涙されたと言われております。

両陛下のご訪問にあたってオランダのメディアは過去の戦争問題を中心とした報道をけたたましく重ねていましたが、この献花以降、そういった報道はピタリと収まりました。

翌日は、ミチルスクール（養護学校）を訪問されました。両陛下が着かれとき児童たちは中庭で絵を書いていました。和やかな交流が始まりました。

ところが、皇后陛下は机に伏せたままで動かない女の子に気づかれました。金色に光るおもちゃの王冠を頭に載せたその女の子は、両陛下をお迎えしようとして張り切りすぎてご到着の時間には疲れて眠り込んでしまったのです。

ハット目を覚ました女の子はすでにお出迎えが終わってしまったことを察知して泣き出してしまいます。するとすぐに走って皇后陛下の元へ駆けよった女の子、すると皇后陛下は女の子をお抱きしめになったのです。

喜んだ女の子は皇后陛下にしがみつきました。この写真はオランダで大々的に報じられ反響を呼びます。

翌日にはライデン大学の寮の前で、窓から身を乗り出した女子大生との楽しく語らいになる両陛下のご様子の報道とともに、オランダ訪問前のどちらかと言えば批判めいた現地の報道は姿を消し、両陛下のお人柄に触れ歓迎ムードに染まっていったと言われております。

ご皇室外交には 1000 人の外交官の価値があるという比喻がありますが、素晴らし皇室を戴いていることに感謝しなければいけませんね。



## 16. 父ちゃんのポーが聞こえる

所は東北金沢での物語です。蒸気機関車の正機関士、杉山隆は妻初江と二人の娘、長女

の恵子、次女の則子の4人家族のごく平和な一般的な家庭の夫であった。

ところが次女の則子はちょっとしたはずみでよく転び生傷がたえなかった。そのことだけが隆の心配の種であったが、もしもと、将来のこともあり、則子連れて金沢の鉄道病院を訪れ診察してもらったのであった。診察の結果、扁平足が原因と聞かされ安心して帰ってきた。

ところが、則子の病状は一向によくなり、学校に上がってから、他の生徒と一緒に走ることも出来ず、ついに肢体不自由児として、市民病院の中にある、治療しながら教育を受ける「こまどり学園」に移らざるを得なかったのです。

学園に移ってから、何かと沈みがちの則子をやさしく指導する元橋先生の努力下、彼女は日ましに元の明るさを取り戻していった。そんな則子を隆はたびたび訪れ、励ました。則子も、何より父の訪問を喜んだが、その父も、時代の移り変わりで近い将来蒸気機関車が姿を消し、気動車に変るためしばらくの間名古屋の鉄道学園に学ばなければならなかった。



父が名古屋に行っている間、大好きな父に会えない則子。しかしながらその学園には、ボランティアで、学園の子達に絵を教える青年たちがおり、その中の、吉川道夫が絵の指導に来てくれるようになった。絵具を手につけて困っている則子の手を道夫はきれいに拭いてくれた。則子は、生まれて初めて父以外の男性に手をふれられ、秘かに胸をはずませた、則子は次第に絵を描く楽しさを覚えるようになった。

しかしながら、一向に則子の病状は回復に向かわず、体の不自由さは、以前にも増し、車椅子の扱いにも不自由をきたす中、彼女の治療に人一倍熱心な久保木先生は、ある日、新潟の名医桜井教授の来診を依頼し、診察して貰うことになった。しかしその結果、則子の病気は現在の医学では治癒の見込みのない、何と云えど死と直面する「ハンチントン舞蹈病」という難病であることが判明するのであった。それを知った隆は、愕然とします。まさか我が娘が自分より早くこの世を……………。

しだいに、病状も進み、則子のような重症患者はこの学園、こまどり学園でも見ることが出来なくなり、人里離れた越山療養所に移ることになった。暫く父の運転する機関車ともお別れねと、則子は父におんぶされ、幼い頃よく見て歩いた機関車の操作場に、思い出を胸につめるように機関車を見て歩いた。

寂しいがらんとした療養所の個室。隆が線香花火を則子に見せている。花火が散ると、目から涙があふれ、家に帰りたいと泣き叫ぶ則子。返す言葉のない隆はやっとの思いで

「そうだ、これから二日に1度、5時50分、療養所の下を則子の好きなSLで通る。そのたびに必ず汽笛で合図を送る、おはよー 父ちゃんが来てくれたと思ってくれ」と説得するのだった。

則子は目覚まし時計を枕元に置いて、父の汽笛を待ちます。遠くから蒸気機関車の音が聞こえます。そしてだんだん近づいて、5時50分丁度、腰山のトンネルに近づいた時、



「ポーッ・ポッ・ポーッ！」

大きく励ます様に汽笛がこだまし、そして空に小さく消えてゆく、朝5時50分丁度、お父さんだ、お父さんの牽いている列車が療養所の下を走っているのだ

「ポーッ」 胸の奥でひそかに、則子も声のない汽笛をあげます。則子は不自由な左手でせつせと詩を書き綴ります。死ぬもんか！っと。

それから幾日か後、父の運転する列車が踏み切りに立ち往生したダンプカーと激突。父も病院に担ぎ込まれます。暫く絶対安静の日が続きます。幾日経ったでしょうか、ふと我に帰ります。とその時看護婦の「杉山さん、気がつかれましたか、奥様から電話です。」

電話の向こうで初枝の涙声「則子が今日一人ぼっちで……父ちゃんのポーが・・・」と隆は、無念の涙にくれます。

ああ則子と約束したことを、最後まで出来なかった。「父ちゃんのポーが聞こえない……………」と言い残して。 ああなんと、なんとした事を、父、隆の鳴らす汽笛を、唯一の生き甲斐に生きてきた則子。その最後の生き甲斐を聞かすことが出来ず、あの世に旅立った我が愛しい娘。則子。

隆は、娘の生きる望みを自分が絶ったとベッドの上に泣きくずれたのです。

茶毘も何とか済ませ。憔悴した隆が職場に復帰します。隆は上司に呼ばれます。「杉山さん、少しは落ち着いたかね。かわいいお嬢さんだったね。杉山さんがおんぶして機関車の操作場にこられていた頃が思い出されるね」と、

「ところで、杉山さん路線の運転は切ないだろう。事務でもいいよ。どうしても路線であれば別のルートにでも手配できるよ」と、

あの腰山の療養所の下を通るのは、あまりにも切ないだろうと、上司は気を使っての言葉です。しかし隆は、今まで通りあの路線を運転させてくれと頼むのです。

復帰後、そして我が娘が、あの世に旅立って始めての乗車。しかし、誇りをもって勤め上げた、SLの運転。制服に着替え、帽子を被り、SLの運転台に立てば、以前の正機関士に。

「信号、青、空圧、油圧、温度、OK。しゅっぱーつ」

「ぼー」 ぎぎぎーと、動輪が力強く回転を始めます。列車は、いつもと同じように、いつもの鉄路を、何も無かったように、北陸の平野をひた走ります。だんだん療養所の下トンネルに近づきます。もう則子はいません。則子に約束通り最後まで、汽笛を鳴らして聴かせてやることは出来なかった。しかし、天国にいる則子に、

「則子、父ちゃんの汽笛を聞かせてやれなくて、すまない、許しておくれ、則子のことを忘れたわけじゃないんだよ」と、隆は汽笛のトリガーに手をかけようとした時です。

「ポー。ポッ。ヴォー」と、朝靄（アサヤ）をついて北陸の空に汽笛が鳴り響き空に消えていきました。隆は思わず、機関助手に眼をやります

「君は……………」と言葉に詰まります。

機関助手はうなずきます。

「先輩が、このトンネルの前で鳴らされるその汽笛の意味を私共は気付いていました。先輩が休んでおられる間、私たち皆で鳴らしました」と。



則子は、

「父ちゃんのぼーが聞こえる・・・・・・」といて、この世を去ったのです。しかしその汽笛は、・・・・父の鳴らす汽笛ではなく、同僚の鳴らす汽笛であったのです。

煤で汚れた隆の頬を大粒の涙が流れ、何度も

「ありがとう、有難う」と頭を下げたのであります。

そのローカル線からSLが消える日まで、その療養所の下のトンネルだけは、どの機関車も汽笛を3度鳴らして入ったそうです。

松本則子さんの詩集『父ちゃんのぼーが聞こえる。その愛と死』

1971年 東宝映画より（この映画は私が学生時代、映画館で見、その時の吉沢京子さんが可愛く綺麗で、その彼女の死、涙が流れて、いつまでも心に残っている作品です。そして鉄道マンの同僚の優しを感じたものです）

平成29年2月1日版 No.16

ここまで読んで頂き有難うございます。ここら辺りで、すこし神道を学んで見ましょう。

神道は、仏教とか、キリスト教と云うように教がついていません。不思議ですね。すなわち教祖がなく我が大和民族が日々の生活の中で生まれた教え、道徳のようなもので神道は神道文化といったほうがいいのかもかもしれません。

神道の教えの根源は、日本の稲作文化から派生した教えだといえるからです。それでは稲作文化から、どのような文化が、派生したか？

例えばこんなのはどうでしょう。

稲は8,000年の連作に耐えた非常に優れた作物です。そして稲は水の豊かに地域に育てられ、その稲を主食に日本人は生きてきました。現在106カ国で栽培され、20億以上の人々の命の糧です。

稲は、四季の内、決められた時に種を撒き、育て、刈り取りという、時が限られます。そこにはその地域でお互いに手間替えという、お互いに助け合わないと、適した季節に作業が出来ない、すなわち収穫量が減る事になり、地域内で助け合うことは極めて必要な要素となり、又この考えが神道の教えであり、日本の文化の根幹をなします。

ところが、お隣の、お父ちゃん、爺ちゃん、婆ちゃんだけでは、如何せんパワーが限られている、さてそこで、なにか力になってくれるものはいないかなと、見渡せば、なんと牛がいた。

牛は、粘り強く、農耕を手伝わせるのは最適。そこで「牛さん少し手伝ってくれたら、餌あげるよ」と言ったら「もー」って了解が得られ、そこで、牛に手伝ってもらい、住居の側に牛小屋を作り、牛を家族同様に扱います。

ところが西洋はどうでしょう、欧州は大陸で、我が国のように稲作には適しません。そこには、牧草が育ちます。

それでは西洋人は、牧草の実を食べて命をつなぐかといえば、それはあまりにも効率が悪い。そこで考えだしたのが、牛に牧草を食べてもらいそのエネルギーを肉として蓄え、その肉を頂くという文化が育ちます。すなわち日本と異なり牧畜の文化です。それ故、新約聖書にも、牛は人の食す、神が与え給うた動物と記述されています。

この文化の差はあまりにも大きいと思いませんか、かたや牛は友達、かたや牛は食べる動物とは。

## 17. 弟の大事にしている縄跳び

20年以上も昔のこと。

オレの家はブチ貧乏で、小4の時の小遣いは月320円だった。320円というのは、当時のてんとう虫コミックの単行本の価格で、漫画が好きだったオレと母親との交渉で決定した金額だった。で、毎月1冊漫画を買うのがささやかな楽しみだったのだ。

冬のこと。体育の授業になわとびが加わった。自分はこのなわとびの授業が毎年大嫌いだった。苦手だったからではない。クラスメイトがビニール製のスケルトン調の縄を使っているのに対し、貧乏のオレは、オヤジがどこからか拾ってきた麻のヒモで作った縄で縄跳びをやっていたのだ。クラスメイトは気をつかってか、そのことには一言も触れなかったが、オレにはわかるんだ、偏見の目が。そしてある日決心した。今度の小遣いは漫画を買わず、みんなと同じきれいなビニール製縄跳びを買おう！と。買いました。ブルーハワイ色のビニール縄跳び。

体育の授業はもちろん、休み時間もみんなに混じって縄跳びなわとび。縄跳びがこんなに楽しいなんて。

その数日後、午後の授業中に窓際の席のオレは運動場に目をやった。午前中に授業が終わった一年生グループが縄跳びをやっている。その中にはオレの弟がいた。泣いているようだ。どうやら友達に麻ロープの縄をバカにされているらしい。顔を真っ赤にし、涙が頬をつたわっているのがここからでも確認できる。家に帰ると弟が部屋で漫画を読んでいた。オレが毎月買ってる漫画だ。

一年生の彼は、まだ小遣いをもらってなくて、おれの買った漫画で喜びを満たしてる身分だ。

オレは彼に言った。

「明日授業が終わったら、オレの授業が終わるまで待ってろ」と。授業後、下駄箱で待ってた弟を連れて縄跳び紐を買いに行った。

「好きな色を選べ」と言ったら、

「兄ちゃんが青だから、この緑のやつにする」と言った。

翌日から、校庭で友達と元気になわとびをやっている弟をたびたび目撃した。自分の欲しいコミックを買わずその金で弟に買ってやって、ああ、よかったなあと思った、そして歳をとるにつれてそんな昔の出来事は自分の記憶から一切消えた。

そして10年余り後の現在。家が貧乏だったオレは高校卒業後、夢も希望もなくフリーターになり、職を転々とし、現在小さな会社に勤めている。ところが頭のいい弟は世間では一流とされる大学を出て、東証一部の会社に入り、トレンドドラマに出てくるようなマンションに住み、何ひとつ不自由のない生活をしていた。自分とは正反対の人生を歩む弟をうっとうしく思い、おれは遠ざかっていたし、会うのも避けていた。そんな弟が突然会社を辞め、大学院に進学したのは2年前。そして卒業を控えた去年の12月のことだ。

研究を続けるために大学院に残りたいという弟。かつては都心のマンションに住んでいたヤツも現在では大学院近くの6畳一間だ。各種書類に保証人の印鑑がいるということで、オレを呼び出したのだった。

パソコン、プリンタ、分厚い資料の山、いかにも研究者の部屋といった感じだ。ダンボールの中にACアダプターコードがからまり入っている。好きにすればいいじゃんと言い、印鑑を押し、部屋を出ようとした時、ダンボールの中に一本の”緑の縄跳び”の縄が見えた。それは使い古した今にも捨ててもよい様な縄跳び。小学生とかが使うあの縄跳びが。

弟も勉強の合間に縄跳びでもしているんだ。としか思わなかった。

帰る途中での電車の車窓から、目に入る小学校の運動場。ふと子供たちが縄跳びをして



いた。その子供たちを見て昔の記憶がよみがえった。

“そうだ！あの縄跳びの縄は、俺が小学校の時、コミックを買う小遣いで買ってやった縄跳びではなかったのか。” “緑色” のそうだあの色だった。

弟がああ時のなわとびを今も大事にしていたのが驚きだった。よほど嬉しかったのだろう。正反対な人生を歩んでいたとはいえ、今もこうしてダメ兄貴を頼っているのかと思うと、うれしくなった。電車内とはいえ目に涙が滲んだ。  
市井の青年の話より

平成 30 年 1 月 1 日板 (No.17)

## 18. 病院の外に健康な日を三日下さい

兵庫県立西脇高等学校に通う大島みち子さん(ミコ)は、顔に軟骨肉腫ができる難病に冒され、阪大病院に入院していました。そこで、同じ病棟にいた河野實さん(マコ)と出会い、年齢も同じ 18 歳ということで意気投合します。

その後ミコは同志社大学へ、マコは中央大学に進学、いつしかお互いに忘れることの出来ない人となっていきます。しかしミコの病状は悪化、阪大病院に再入院、ミコは大阪、マコは東京。ミコは恋人マコの手紙を心の支えに闘病生活を送ります。その間二人が交わした書簡は 400 通。

しかしミコは、マコの 22 歳の誕生日の前日、21 歳で帰らぬ人になってしまいました。

不治の病に伏すミコ、大島みち子と彼女を励ますマコ、河野實の二人が純粹に、そしてひたむきに生き、悩み、喜びを手紙に綴っているその言葉は、今私たちに感動を呼び起こし、愛するとは、健康の素晴らしさとは、を改めて教えてくれます。

昭和 39 年公開の映画「愛と死を見つめて」。ミコ役に吉永小百合さん。マコ役に浜田光夫さんが好演され、吉永小百合さんの美しさ故、難病で亡くなるミコにことさら涙したものでした。



ミコが病院の床に伏し

「病院の外に健康な日を三日下さい」から

一日目は、私の故郷に飛んで帰りましょう。そしておじいちゃんの肩をたたいて、それから母と台所に立ちましょう。おいしいサラダを作って父にアツカンを一本つけて、姉達と楽しい食卓を囲みましょう。

二日目、私は貴方の所へ飛んで行きたい。貴方と遊びたいなんて我がまま言いません。お部屋を掃除してあげて、ワイシャツにアイロンをかけて、おいしいお料理を作ってあげたいの。そして……お別れに優しくキスをしてください。

三日目、私は一人ぼっちで思い出と遊びます。そして静かに一日が過ぎたら、三日間の健康ありがとうと言って永遠の眠りにつくでしょう

いつまでも心に残るミコの言葉です。

人は一人では生きていけません。誰かが誰かを愛している。

No.18 平成 30 年 9 月 1 日版

## 19. ひとつのものも自分を映す鏡

車を運転しながら、ふと思うのです。前を走る車、すれ違う車、どの車もピッカピッカ。質素儉約は死語でしょうか。

古い車は何処に行ったのでしょうか。質素儉約が日本人の昔からの心得でしたのに、どうしたのでしょうか。聞くところによると、180 カ国に日本の中古車が輸出され走っているとのこと。10 万キロ程度まで日本で走り、そして其後 20 万キロを超えるまで海外で走る日本車。古くなっても壊れないそうです。日本人として誇っていい日本の工業力ですね。

さて、ピッカピッカの車に乗りながら、給料が少ない、生活が苦しい、年金が減る・・・、政治が悪いと。

資源の無い日本、戦後 70 年。今でこそ経済成長は鈍化したとはいえ、この復興は世界の奇跡と言われ、戦後焼け野原からがむしゃらに働いてここまで導いてくれた明治、大正生まれの先人たち、その苦勞を忘れてはなりません。ところが豊かさに慣れ感謝を忘れた日本人。メディアでは、これでもかこれでもか新しい商品が紹介され、日本人よ何か忘れていませんか？



その昔と言っても少し昔のことです。どの家庭でもお祖母ちゃんもお母さんも、もの持つくるちが良いえに繕いものが上手でした。衣類にできた小さな穴や亀裂などは、さっさと綺麗にしてしまいます。幼いころ、肘や膝が薄くなったり抜けてきたりすると、あて布をして、最後は、ぞうきんとして暮れの大掃除に役立てられます。今は化繊が多いので雑巾には無理かもしれませんが

こうして、とことん使いこなしたものです。



『武士道』に儉約の徳を説いたのは経済的な理由からではなく、むしろ節制の訓練の為のものなのです。贅沢は人間を墮落させる最大の敵と見なされ、「生活を簡略化することこそ武士階級の慣わしである」とされたように、質素儉約は武家の大切な心得でした。

質素儉約は生活を味気なくするものではなく、また物質的な贅沢が必ずしも心豊かな暮らしをもたらすわけでもありません。

ものを大切にすることを通して、工夫する楽しさや喜び、ひいてはものにとらわれない精神の自由さが得られるように思います。

さて、ものを大切に背景には「すべてのものに神さまが宿っている」という日本ならではの信仰心があるのです。昔はどんなものにも神さまが宿っていると教えられたもので、ものを粗末にするということは、神さまを軽んじるということになるのです。

それは自分を大事にしていないのと同じことだとお祖母ちゃんは教えました。

「ものを大事にしないのは神さまに感謝する心がないからですよ。それは自分を大事にしていないのも同然ですよ」と。

神社のお社には鏡が祀(マツ)られています。(御扉の奥にあって見えない場合もあります)鏡に向かえば、そこに自分の姿を見出します。このことは私達の中にも神さまがいるよ！ということで、この世のすべては我が鏡であるということをお教えてははいないでしょうか。

相手に対して微笑めば微笑みがかえってくるように、人はもちろん、私の心を写す鏡です。ものを大事に扱うと、ものもこちらを大事に感じて長く仕えてくれます。

愛着のあるものというのは単なる「もの」で終わらず、そこに魂に似たものを感じるものです。職人が修繕する時でもできるだけ美しく仕上がるよう心がけるのはそのためでしょう。

大森貝塚を発見した「モース」は、日本での生活のなかで、日本人が障子の穴をふさぐのに、桜の花をかたどった紙を貼り付けることを目にし、日本人の品性に驚いています。

私の車は17万キロ、愛着持ってもう少し乗ろうかな。



No.19 平成30年9月1日

## 20. 神嘗祭、新嘗祭

各地で秋祭り、秋の実りを迎える頃となりました。各地で秋祭りが行われ、豊穰に感謝する祭りです。皇室では神嘗祭(カネメシイ)、そして新嘗祭(ニメシイ)という祭礼があります。

皇室においては、神嘗祭は、天皇陛下が、神に新穀を供える祭礼ですね。そして新嘗祭は、陛下が新穀を神に供え、自らも食される祭礼です。

これに照らし合わせますと、秋祭りがさしずめ神嘗祭、この宮尾八幡宮では、秋祭りが10月そして新嘗祭が12月に入ってからです。そして新嘗祭では祭典の後講話があります。この講話があるのは、どこのお社でもあるわけではなく大変貴重な風習です。そして、新米のオムスビで直会です。



昨今は、コンビニの店頭で“おむすびが新米になりました”との横断幕を見る時代、以前は日本国民すべからく、新嘗祭までは、新米を頂かず、新嘗祭が終わると新米を頂いたもの、そのようなお米に対する心得、信仰心が残っていましたが、そのような尊厳はどこに行ったものやら。

一方、商業ベースに乗って、ボジョレー解禁で大騒ぎ、ワインの味がわかりもしない者までわかったような顔をして、その上有難がって、ワインのグラスを傾けるといったあんばい。日本人としてなにか忘れてはいませんかと言いたい。

公共放送を自認するNHKでさえ、ボジョレー解禁をニュースとして取り上げるのは良いとしても、せめて日本の公共放送ならば、せめて日本の伝統である、神嘗祭、新嘗祭を取り上げ、天皇陛下が新穀を神様にお供えされ、そして新嘗祭では、陛下自ら食される、

我が国民としても、“今日から新穀を頂いた習わしがありました”程度はニュースとして取り上げるのが日本の公共放送の使命だとも思えますが如何でしょうか。

No.20 平成 30 年 9 月 15 日